

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

チアパスにおける先住民運動(XVII) :
トホラバル居住地域における自治と土地防衛闘争(その2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 致広, Kobayashi, Munehiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/600

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



チアパスにおける先住民運動 (XVII)

——トホラバル居住地域における
自治と土地防衛闘争 (その2)——

小 林 致 広

(4) トホラバル・エヒード村落連合の結成と崩壊

ミゲル・デラ・マドリー政権(1982年12月－1988年11月)は、1983年5月にチアパス計画(Plan Chiapas)を発表し、未整備な交通網整備、環境破壊防止、農地紛争解決を中心課題として掲げた。1984年、チアパス州政府も農地再活性化計画(Programa de Rehabilitación Agraria)を策定する。UUと連邦政府との交渉協調関係とは別に、チアパス州における農地紛争は依然として深刻な問題だったのである。UU傘下の農民組織やエヒードだけでなく、大農園の農業労働者も農地獲得を目指し、土地占拠闘争を展開していた。

トホラバル居住地域で農業労働者による大農園占拠を主導していたのは、CIOACのチアパス国境隣接地域支部である。¹⁾メキシコ共産党系の組織として発足したCIOACは、農業労働者の組合化を中心課題としていたが、州北部コーヒー生産地域などでの経験から、大農園占拠という方針を選択していた。

農地再活性化計画では、大農園の土地を州政府が購入し農民に分与することになっていたが、大土地所有者と結託した州政府や農地改革省事務所による資金不正操作などが行なわれた。知事一族が大土地所有者であるラス・マルガリータスやコミタン地区では、実質的な大農園の土地接収はほとんどなく、農地分与はCNC傘下の農民に対して優先的に行なわれた。²⁾

もともと、エヒード組合結成に当たっては、エヒードの総意で参加するこ

とが建前になっていたが、エヒード人口の多いラス・マルガリータス地区西部の高原地域では、エヒード権所有者 (ejidatario)、エヒード権所有者の同居者 (avencidado)、エヒード拡張地の申請者 (solicitante) といった住民相互の利害対立は不可避であった。トホラバル居住地域のエヒードでも、官製農民組織 CNC を動員したエヒード分断工作が執拗に展開されていた。また、カトリックのマリスタ修道会による司牧活動とともに、長老派教会やアドベンティストなど新教の布教活動も活発化し、信仰上の立場の差異もしだいに顕在化していく³⁾。

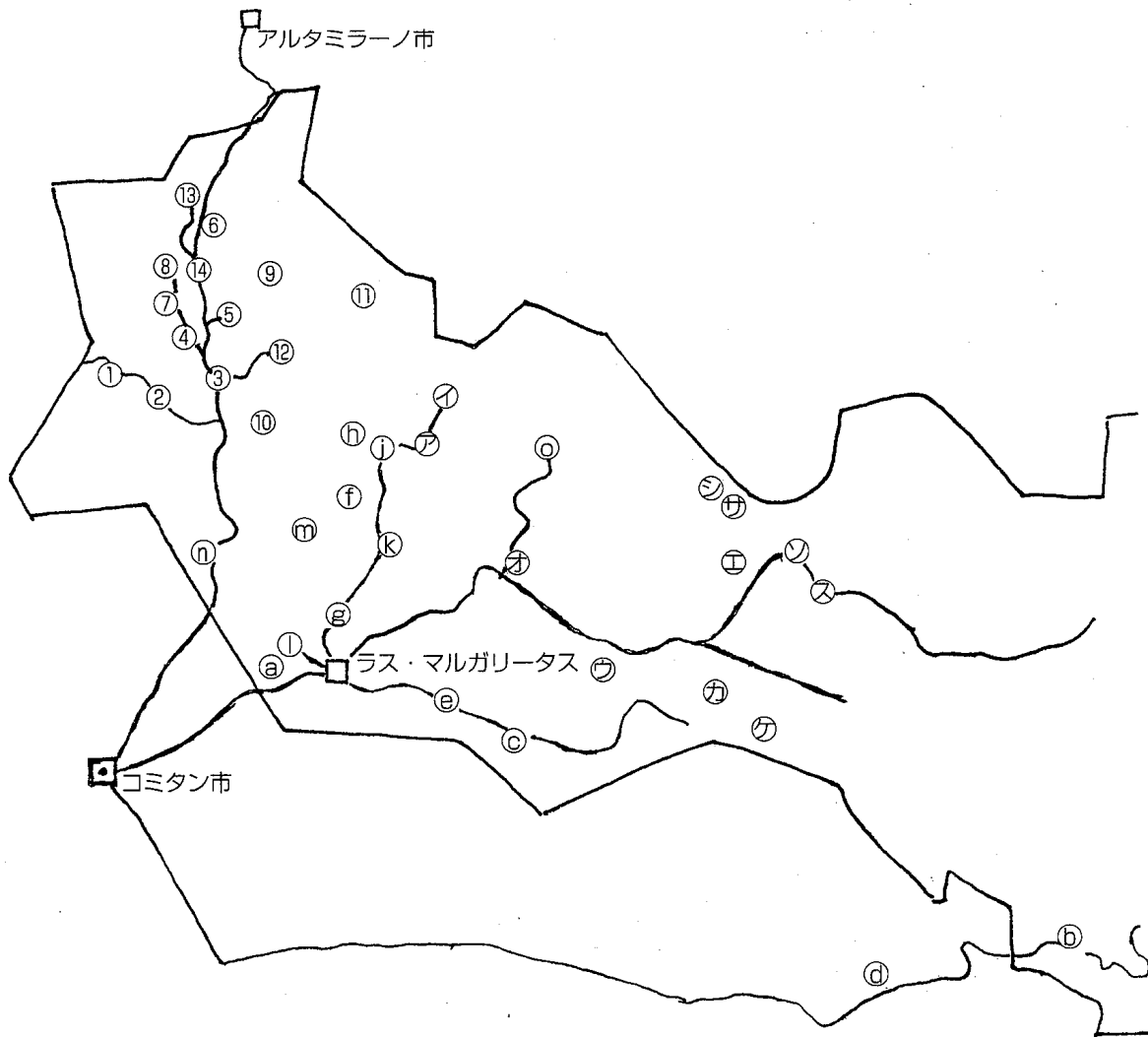
前述の「11月20日」エヒードで起きた農民闘争エヒード組合支持派農民殺害にもかかわらず、1982年のラス・マルガリータス地区首長選挙で、組合執行部は CNC の上部組織の PRI 派候補を応援した。さらに、1984年のトホラバル最高審議会メンバーの選出でも、CNC 候補の押し付けという介入があった。エヒード組合執行部の政府よりの姿勢に不満を募らせたエヒードのなかには、土地闘争や行政地区の政治権力掌握を目指していた CIOAC との連携を模索するものもあった。従来無視されてきた長老制度の見直し、外部顧問の排除など、トホラバル民族自治を表に出した新しい農民組織を結成することになる。

こうして1985年に結成されたのが、トホラバル・エヒード村落連合 (Unión de Ejidos y Pueblos Tojolabales, UEPT) である。農民闘争エヒード組合に加盟していたエヒードのうち、フスト・シエラ、「11月20日」、ソノラ、イグナシオ・サラゴサ、ラ・イルシオン、ヌエボ・メヒコ、ピエドラ・ウイシュトラ、エル・ロサリオ・バウイツ、サンカラランピオといったエヒードなどが UEPT 結成に参加した。さらに、CIOAC が活動していたエヒードのメンバーも UEPT に加わった。トホラバル民族の自立的運動の構築に向け、UEPT は、「土地と自由」エヒード組合だけでなく、ラス・マルガリータス地区南西部のベラクルスやアンパロ・アグアティンタなどのエヒードで構成される新しい道 (Yaj K'achil B'ej) エヒード組合にも、「トホラバル権

表 1 : トホラバル審議会参加エヒード

トホラバル エヒード・ 村落連合	① Buenavista Bahuitz ② El Rosario Bahuitz ③ González de León ④ Ignacio Zaragoza ⑤ Justo Sierra ⑥ La Ilusión ⑦ Las Palmas ⑧ Nuevo México ⑨ Piedra Huixtla ⑩ Plan de Ayala ⑪ S.Caralampio ⑫ Santa Rita Sonora ⑬ 20 de Noviembre ⑭ Vergelito
新しい道 エヒード 組 合	Ⓐ Agua Prieta Ⓑ Amparo Aguatinta Ⓒ Artículo 123 Ⓓ Cuauhtémoc Ⓔ Francisco y Madero Ⓕ Jalisco Ⓖ La Libertad Ⓗ Mexiquito Ⓘ Los Pozos Ⓚ Rafael Ramírez Ⓛ Saltillo ① S.José Ⓜ Veracruz Ⓝ Yaxa Ⓞ Gb Gabriel Leyva Velázquez
土地と自由 エヒード 組 合	Ⓐ Aquiles Serdán Ⓛ B.Domínguez Ⓜ Buenavista Pachán Ⓟ Carrillo Puerto Ⓡ Chiapas Ⓢ Granicio Sánchez Ⓣ Monte Cristo Viejo Ⓡ Nueva Revolución Ⓢ S.Antonio Ⓢ Santuario Ⓢ S.Juan del Pozo Ⓢ S.Salvador Ⓢ S.Pedro Soledad Ⓢ Tabasco Ⓢ Vicente Guerrero

出典 : Antonio Hernández Cruz, "Autonomía Tojolab'al: Genesis de un proceso", en Aracely Burguete ed., *México: experiencias de autonomía indígena*, IWGIA,1999,p.183



地図 1 : トホラバル審議会参加のエヒード
記号は表 1 に対応

力」の構築を呼びかけていった。

この UEPT の呼びかけを受け、1986年から1987年前半にかけ、トホラバル民族の自治構築を目指す運動が展開されていく。1987年10月、UEPT 創設一周年としてフスト・シエラで開催された集会で、トホラバル審議会 (Consejo) が発足することになった。審議会では、エヒードの当局者だけでなく、古老、賢者、伝統的医師など超自然的力と交流できる伝統的権威者を尊重する方針が取り入れられ、意思決定機関として、300名以上の代表で構成された常設会議 (Asamblea Permanente) が設置された。翌1988年4月、フスト・シエラで第1回トホラバル民族議会 (Congreso de los Pueblos Tojolabales)⁴⁾ が開催されている。

翌1989年4月、「アヤラ綱領」エヒードで UEPT 創設2周年記念集会が開催されたが、その後、トホラバルの自治確立を求める運動は急激に力を失っていく。農民運動を担ってきた民主派の若手教師やカテキスタなどから、トホラバル審議会のあり方に対して、呪術師権力の復活という批判が起きたのである。その背景には、1988年12月発足のサリナス政権の全国連帯計画による農民運動の囲い込みに対する CIOAC 指導部の方針転換も背景にあったと思われる。トホラバル審議会の崩壊を受け、ラス・マルガリータス地区の CIOAC 傘下のエヒード組合も分裂することになる。⁵⁾

(5) 全国連帯計画と EZLN 蜂起による先住民農民組織の変動

1. サリナス政権による取り込みと離反

サリナス政権期 (1988年12月－1994年11月)、トホラバル居住地域もメキシコ社会全体を覆った経済、政治、社会の変動のなかに飲み込まれていく。そのひとつは、北米自由貿易協定に象徴される市場の自由化が農村部にもたらした大きな変動である。チアパス州の場合、1989年のコーヒーの国際市場価格が2分の1になるという大暴落は、小規模コーヒー生産者に大きな大打撃を与えた。サリナス政権は、1998年の大統領選挙を契機に「生産」を名目

に取り込んだ独立系農民組織に属する中小規模のコーヒー生産者を見捨てることはできなかった。サリナス政権が推進した全国連帯計画のチアパス州向け資金の大部分は、約6万人の小規模コーヒー生産者救済に向けられた。

その一方で、州政府も独自の資金を設立し、行政地区首長や CNC 指導者を通じて州内の農民層の囲い込みを企てていた。連邦政府の連帯資金が独立系農民組織に流れることは、州知事にとり目障りな障害だった。1990年、州知事は、セルバ・エヒード組合などによる旧 INMCAFÉ の加工場を購入するための連帯資金の獲得に協力したトホラバル地区 CCI センター長を強権的に解任している。⁶⁾

1990年後半に正式発足した「先住民族の文化財産振興」という名目の連帯地域基金 (Fondo Regional de la Solidaridad, FRS) には、チアパス州の独立系先住民農民組織も基金受託者として参加することになる。基金の管理運営にあたった INI トホラバル地区 CCI は、大土地所有者の利権に敏感な州政府から独立したかたちで、参加型インディヘニスタ政策を実践することができた。⁷⁾「経済的先住民組織」だけでなく、FIPI 傘下の123共同体など独立系先住民組織にも基金を提供したチアパス州 INI のFRS 運営は「例外的」と、従来の INI 政策を批判してきたマルガリート・ルイスも評価している。⁸⁾

社会紛争のない安定したメキシコというイメージを国際社会で演出するうえでも、サリナス政権は、ラカンドン共同体の隣接地域に入植してきた農民・先住民の土地所有をめぐる1970年代からの紛争に対して解決策を提示する必要があった。大統領は、就任直後の1989年1月、溪谷部に位置する26共同体にラカンドン共同体の枠外にあるとして土地所有権を認める布告を発令した。大統領官邸での土地所有認定式には、オコシゴ地区の ARIC・UU のエヒードやラス・マルガリータス地区のセルバ・エヒード組合の代表が出席していた。⁹⁾

一方、TLC 締結に向け、サリナス政権は土地の自由取引の障害となっている憲法27条の改正を推進した。憲法27条改正は、エヒードの分割、貸与、売買を可能にし、農民以外の組織によるエヒードの土地所有を認知するもの

で、今後は土地分配が実行されないことを意味していた。1991年11月、改正案が国会に上程されると、チアパス州ではベヌスティアーノ・カランサ地区のエミリアーノ・サパタ農民組織 (OCEZ) や ARIC などによる大規模な抗議行動が展開された。現在では、1989年のコーヒー価格大暴落とともに、1991年2月の憲法27条改正によって土地分配の可能性が否定されたことが、独立系農民組織に属する農民たちの参入による EZLN 勢力拡大の要因であることはよく知られている。

同時に、大陸規模での先住民民衆の抵抗五百年キャンペーンという文脈のもと、メキシコでも「五百年の抵抗評議会」が組織され、先住民族の文化的権利だけでなく、経済、社会、政治的諸権利を憲法で銘記することなどを求める多様な運動が展開していた。運動の中心的な推進者は、メキシコ社会党 (PSM) 代議士となったマルガリート・ルイスで、彼が中心となってマヤ民族闘争組織調整委員会 (COLPUMALI) が組織された。また、州北部パレンケ一帯の先住民族の自由防衛委員会 (CDLI)、チアパス高地の追放新教徒の先住民組織であるチアパス高地先住民代表者審議会 (CRIACH) など、当時のゴンサレス・カリード州知事(1988年12月－1992年12月)の強権的弾圧に対抗していた。先住民族の権利に関する憲法第4条改正をめぐる1990年後半の国会論議に際し、FIPI は民主革命党を通じて、先住民族の地域自治権の憲法への明記を提案していた。¹⁰⁾

1992年10月12日にサンクリストバル市で開催された抵抗の五百年集会は、サリナス政権下でひそかに進行していた EZLN の組織拡大の一端が窺えるものとなった。TLC 反対、憲法27条改悪反対を唱えるデモ隊の隊列は2万人を越していた。抗議行動には、CIOAC, OCEZ, ARIC などの独立系先住民農民組織が参加していた。参加した先住民の約半数を動員していたのが、1991年7月に結成されたエミリアーノ・サパタ独立農民全国連盟 (ANCIEZ) である。当時、この農民組織は EZLN の公然組織として機能していた。¹¹⁾

2. 武装蜂起後の農地占拠と自治地区創設

1994年1月、EZLN 武装部隊がサンクリストバル、オコシngo、アルタミラーノ、ラス・マルガルリータス市の中心部などを占拠する。連邦政府軍はチアパス州の各地に展開したが、2月後半、EZLNと連邦政府と交渉が始まる。EZLN 支持基盤組織の農民による農園占拠が展開したオコシngo、アルタミラーノ、ラス・マルガルリータス地区などの「紛争地区」だけでなく、州内の各地で、さまざまな農民組織に属する農民による農地占拠が展開された。「紛争地区」の中小農園主は、1994年上半期で約6万haの農園が占拠されたと主張している。1994年上半期、非紛争地域の農地占拠は約350ヶ所、約3万haとされている。

1994年4月、連邦政府とチアパス州先住民農民組織協議会（CEOIC）とのあいだで、占拠活動停止、正当な解決、逮捕命令撤回、州政府との交渉継続という合意が結ばれ、農地改革省（SRA）と州農地問題調整委員会が占拠農地を購入し、農民に供与する方針が明らかにされた。4月段階の占拠件数は318ヶ所だったが、19組織が占拠している261ヶ所、33,770haの農地が供与されることになった。しかし、実際に供与された農地は17,655ha だけで、半分近くの8,055ha は官製組織 CNC に属する農民が受給者となっていた。¹²⁾

そのため、農地占拠は1994年の後半期も減らなかった。7月の調査では、占拠農地は363ヶ所、36,924ha とされていたが、年末には1,000件を越えていた。背景には、1994年8月の不正選挙への「市民抵抗」が州全域で展開され、その一環で農地占拠が行なわれていたことがある。一方、政府は信託基金94を発足させ、政府系の CNC や農民教師連帯（SOCAMA）に優先的に供与していた。

1994年12月中旬、EZLN は38行政地区で「インディオ人民のための正義と尊厳のある和平」作戦を展開し、連邦軍の包囲網を軍事的衝突なしで突破した。EZLN は、12月19日、「非武装の市民勢力」と協力して30の反乱行政地区が設立されたことを公表した。トホラバル居住地域には五つの反乱行政地

表 2 : トホラバル居住地域における1994年12月創設の反乱行政地区

反乱行政地区	主邑	主要組織	地区	主要構成民族
マヤ民族の自由	Santa Rosa El Copán	EZLN ARIC	Ma.	トホラバル, ツェルタル ツォツイル
サンペドロ・デ・ ミチョアカン	Guadalupe Tepeyac*	EZLN CIOAC	Ma	トホラバル, ツォツイル
土地と自由	Amparo Aguatinta	EZLN CIOAC	Ma.Ind. Tri.Oco	トホラバル, ツェルタル ツォツイル, チョル
ミゲル・イダルゴ	Justo Sierra**	CIOAC UEPT	Ma. Com	トホラバル
11月17日	Morelia	EZLN Tzoman	Alt. Chanal	ツェルタル, トホタバル ツォツイル

*1995年2月の軍侵攻以降, La Realidad **1998年以降, San Caralampio El Edén
Ma: ラス・マルガリータス, Ind: ラ・インデペンデンシア, Tri: ラ・トゥリニタリア,
Oco: オコシンゴ, Com: コミタン, Alt: アルタミラーノ

区が設立されている(表2参照)。

そのうちの三つがラス・マルガリータス地区南東部の溪谷地域に位置し、二つがアルタミラーノ地区からラス・マルガリータス地区北西部の高原地域に位置していた。新しい入植地が分布している溪谷部のサンペドロ・デ・ミチョアカン、マヤ民族の自由、土地と自由の反乱行政地区においては、トホラバル系住民だけでなく、ツォツイル、ツェルタル、チョル系の入植住民も多かった。しかも、トホラバル系住民の多くも入植2世代目にあたり、トホラバル語話者比率はそれほど高くなかった。

五つの反乱行政地区のうち、1994年以前に確固たる EZLN 支持基盤が組織されていなかった地区は、ミゲル・イダルゴ反行政地区、ならびにグアテマラ国境に沿って広がっている土地と自由反乱行政地区といってよい。この二つの地区において、反乱行政地区の担い手となったのは、CIOAC 傘下の農民組織と思われる。後者の土地と自由反乱行政地区の主邑アンパロ・アグアティンタは、1995年2月26日、CIOAC 主導のもとで設立が宣言された「土地と自由」多民族自治地区(Región Autónoma Pluriétnica, RAP)の役場所在地でもある。この RAP 運動を中心的に担ったのは、1994年10月か

ら、ラス・マルガリータス地区役場の占拠を指導してきた CIOAC と Toj Tzotz Li Maya-FIPI である。アンパロ・アグアティンタは、CIOAC 傘下のヤフカチル・ベフ・エヒード組合 (UE Yajk'achel Bej, 新しい道) に属するエヒードだった。

ミゲル・イダルゴ反乱行政地区があるラス・マルガリータス地区北西部は、かつてトホラバル権力による民族自治政府の構築を目指した UEPT に属していたエヒードの多くが存在している地域である。CIOAC 傘下にあった UEPT 指導者が中心となって、反乱行政地区創設に携わっていたものと思われる。反乱行政地区の主邑となったフスト・シエラは、1988年の第1回トホラバル民族議会の開催地で、トホラバル審議会運動の活動拠点のひとつでもあった。

1994年10月12日、国境隣接地域の CIOAC 指導部は、傘下のエヒードや村落は「解放地帯 (zonas liberadas)」であると宣言した。CIOAC 傘下のエヒードや村落は、8月選挙の不正に抗議する「市民抵抗」を9月から展開し、税金や水道・電気料金などの不払い、当局による公共工事の阻止、小学校や診療所の閉鎖などを行っていた。当時の CIOAC 地区委員会指導者ホセ・アントニオ・バスケス・エルナンデスは、トホラバル自治地域には約50～60のエヒードや村の2万人が参加し、インディペンデンシア地区などに活動を広げることを語っている。ラス・マルガリータス地区などの占拠した農地約1万5千ha から撤退しないことを明らかにしていた (*La Jornada*, 24/octubre/1994)。その2ヵ月後、フスト・シエラを主邑とするミゲル・イダルゴ反乱行政地区が誕生している。

CIOAC 傘下の農民組織が反乱行政地区の運営にどのように関与し、EZLN 支持基盤組織がどの程度存在していたかについては不明な点が多い¹³⁾。しかし、1998年5月、ラ・イルシオン、ヌエボ・メヒコ、ベヘリート、エル・ベルヘル、サラゴサ、ソノラなど UEPT の構成員の一部は、ミゲル・イダルゴ自治地区への参加を取りやめることを決定したという報告がある¹⁴⁾。そのことが

らも、CIOAC 傘下の農民先住民組織は、先住民自治地区運動に参加しながら、ミゲル・イダルゴ自治地区運営に関与したものである。

3. 軍事侵攻からサンアンドレスの対話

1994年12月の反乱自治地区創出によって生じた経済危機に直面したセディージョ政権（1994年12月－2000年11月）は、1995年2月9日、EZLN 支持基盤組織のある紛争地域に連邦軍を侵攻させた。グアダルーペ・テペヤックをはじめ、いくつもの EZLN 支持基盤組織のあった共同体の住民は山中に避難することを余儀なくされる。なかには、ヌエボ・モモンの「12月24日」共同体のように取り戻し農地で生活を開始したばかりの農民も少なからず存在していた。

1995年3月9日の「チアパスにおける対話調停和解法」の成立に伴い、4月半ばから、チアパス高地のサンアンドレス・サカムチェンで EZLN と連邦政府の「対話」が始まったが、政府軍は撤退することなく、「紛争地域」に多くの軍警察の駐屯場や検問所が設立された。この軍事化を背景に、連邦・州政府は、EZLN を孤立化させるためのさまざまな戦略を展開していく。

そのひとつが農民組織の占拠した農地を政府が買上げ、分配するという一連の政策である。具体的には、「95年基金（Fondo 95）」と呼ばれるチアパス州農地取得計画に基づくチアパス計画（PROCHIAPAS）と呼ばれる管理保証信託基金契約計画、大土地所有者への補償と占拠地の所有権を認知するための土地管理移転信託基金などの設立である。農地を占拠した農民が属する農民組織との交渉は、1995年4月頃から1996年の3月中旬まで続く。州内の69の農民組織、42の農業集落が、SRA ならびに州政府と協定を締結することになる。¹⁵⁾

しかし、協定実施に当たり約23万haの農地購入に必要な資金約9億ペソが調達できず、19万ha分の購入資金を確保した段階で政府は農地購入を終了した。しかも、農地購入資金の申請や手続きは PRI 系農民組織から優先的に始まり、1996年4月段階で、チアパス州人民民主会議（AEDPCH）傘下

の独立系農民組織の手續きはまったく始まっていなかった。AEDPCH 傘下の独立系農民組織には、協定対象から外された農地に対する闘争を展開する課題が残されていた。

1995年5月20日付けの EZLN 先住民革命地下委員会による AEDPCH の一部指導者に対する批判の書簡¹⁶⁾は、EZLN と独立系先住民農民組織との距離を遠ざける要因となったとされている。政府との交渉拒否という EZLN の原則主義的対応の前に、既存のエヒードの多くはEZLN支持の立場を崩したが、成立の新しい新入植地はEZLN支持を堅持する傾向があったことが指摘されている¹⁷⁾。

1996年3月の農地協定の基づく農地分与、憲法27条改正にともなうエヒード認定計画 (PROCEDE) によるエヒード農地認定書の公布などによって、土地を要求してきたチアパス州の農民組織の利害対立はしだいに露わになっていく。それがもっとも顕著に表れたのが、ラス・マルガリータス地区における CIOAC 傘下の農民組織とEZLN支持派の農民との対立である。

1997年10月初旬フランシスコ・マデロで開催された第4回 CIOAC 地域会議では、サパティスタとの対立を回避する方策を模索する必要性が指摘されている。CIOAC 州代表ルイス・エルナンデスは、CIOAC 傘下の38共同体で1993年段階で EZLN との競合関係が生じ、1994年1月の武装蜂起後、いくつかの CIOAC 傘下の共同体が EZLN に参加したことを明らかにしている。同時に、1995年2月の連邦軍侵攻後、いくつかの共同体が EZLN から離脱しはじめるが、その契機が1995年に始まった SRA と農民組織のあいだの農地供与をめぐる交渉だったことを明らかにしている¹⁸⁾。

(6) 反乱鎮圧作戦による EZLN 反乱行政地区の切り崩し

政府との対話が途絶えてしまった1997年から2000年夏の選挙までは、EZLN支持基盤組織から離脱する農民が増加していった時期である。1997年12月22日のアクテアル虐殺、1998年初頭から組織的に展開された州政府によ

るサパティスタ反乱行政地区に対する軍事攻勢などによって、サパティスタ支持に回っていたエヒードのなかには、EZLN 支持から離脱するものが少なくなかった。

1. 反乱行政地区への締め付け

官製農民組織や反サパティスタの農民組織を動員した EZLN 支持基盤組織への攻撃は、1997年夏の間選挙運動が始まった頃に始まったが、1997年秋にあったサパティスタ1,111名の首都行進の前後から、さらに強化されていた。

たとえば、1997年10月18日、ラス・マルガリータス地区のエル・ベルヘルにおいて EZLN 支持派とされた農民7名が行方不明になる事件があった。4ヵ月後の1998年2月14日、近くの鍾乳洞で彼らの遺体が発見された。被害者家族は、農民闘争エヒード組合メンバーたちを殺害の下手人として告発した。エル・ベルヘルのエヒード組合側は7名殺害事件への関与を否定したが、組合指導者の一人が拘束されてしまう。それを契機に、「農民闘争」エヒード組合メンバーは CIOAC 官製派に鞍替えしたという。しかし、最終的には、別の指導者が組織したマヤ・トホラバル民族連合 (UPMT) に属することになった。¹⁹⁾ この事件の背景には、1997年の中間選挙後、ラス・マルガリータス地区の PRI 派と PRD 派の勢力地図に大きな変化が起きていたことがある。

犠牲者を伴う暴力的対立に至らない形での EZLN 支持基盤組織から離脱した例も少なくない。アルタミラーノ地区サンミゲル・チピティクの少数派住民は、1997年末、話し合いで、多数派の EZLN 支持基盤から離脱している。また、同地区のガビーノ・バレラの60家族も同じ事例として上げることができる。²⁰⁾

1998年1月初旬、連邦政府軍は EZLN 支持基盤組織の集落に対する嫌がらせを継続的に展開した。モレリアを主邑とする「11月17日」反乱行政地区 (アルタミラーノ地区) の EZLN 支持基盤組織の集落には、何度も執拗に侵入を繰り返した。トホラバル系の集落サンミゲル・チプティクやヌエバ・エ

スペランサでは、住宅破壊、家畜や食料、診療所の薬品や女性組織の機材強奪、売店の現金略奪（2集落で6万7千ペソ）、礼拝所（*ermita*）への灯油散布、拷問なども行なわれた。1月2日のヌエバ・エスペランサへの軍侵攻に対して、近隣13集落の女性が結集し、4日早朝に連邦軍を追い出したという。²¹⁾

1998年4月から6月にかけて、反乱行政地区の主邑に対する軍事攻撃は本格化していく。²²⁾ こうした軍事攻勢のなか、1998年5月、ミゲル・イダルゴ反乱行政地区に属していたラ・イルシオン、ヌエボ・メヒコ、ベルヘリート、エル・ベルヘル、サラゴサ、ソノラのエヒード構成員の一部は、ミゲル・イダルゴ反乱行政地区への参加を取りやめることを決定する。これらのエヒードはUEPTの傘下にいたことがあり、改めてCIOAC傘下で新組織エヒード組合（*Unión de Ejidos Organización Nueva*）を結成することになる。

1999年になると、アルボレス・ギジェン州知事代行による大規模な「EZLN離脱」という茶番劇が演出されていく。1999年3月末、オコシンゴ地区のハタテ川岸で、「元サパティスタ」による武器返還、帰順式が行なわれた。ついで、4月16日には、ラス・マルガリータス地区の「11月20日」エヒードでは、EZLN離脱家族と知事代行の和解集会が開催された（*La Jornada*, 17 / abril/1999）。それに先立つ3月下旬、「11月20日」エヒードの労働党支持の農民4名が拘束され、PRIに鞍替えするよう脅迫される事件があった。彼らはミゲル・イダルゴ反乱行政地区に避難していたが、4月12日、アルタミラーノの市場で拉致され、「11月20日」エヒードでの投降式に無理やり動員されたという。この「EZLN離脱」を演出するため、ラス・マルガリータス地区首長は、PRI派住民に、「元EZLN」メンバーとして投降式に参加すれば、EZLN支持基盤組織の農民が占拠している農場を与えると宣伝して回っていたという。²³⁾

2. 元サパティスタの寝返り

2000年3月17日、ラス・マルガリータス地区のブエナビスタ・パチャンのEZLN支持基盤組織は、ラス・マルガリータス地区CIOAC官製派指導部に

に対する告発を行っている。²⁴⁾ 告発されたのは、ホセ・アントニオ・バスケス・エルナンデス（通称カマロン、バフク・エヒード出身）、ルイス・エルナンデス・クルス（1995年から州 CIOAC 指導者、ベラクルス・エヒード出身）、ミゲル・アンヘル・バスケス・エルナンデスなどである。彼らは、サパティスタ蜂起後、CIOAC 内部で EZLN 支持を表明し、「サパティスタの友人」であることを鮮明にしていたと指摘されている。とくに、カマルンの場合は、サンペドロ・デ・ミチョアカン反乱行政地区審議会代表を務めていたとされる。²⁵⁾

告発した EZLN 支持基盤組織のメンバーも、もともとは CIOAC 構成員だった。1995年4月、ブエナビスタ・パチャンの CIOAC メンバーは、サンホセとサント・ドミンゴの農地を取り戻した。しかし、占拠した土地の境界を定める段階になって、境界に張った鉄条網を倒すとか、植えたバナナを抜き取るなどの嫌がらせが始まりだした。CIOAC 官製派指導部の下部組織を無視した運営に対抗するため、二つの農地に入植した住民は CIOAC 独立派を組織することになる。直後から、共同体の乗合バスを接収するなど、ブエナビスタ・パチャンの CIOAC 官製派による迫害はさらにエスカレートしていった。1997年、住民は EZLN 支持基盤組織を組織することになった。²⁶⁾

EZLN 支持基盤組織に属するトホラバル系住民の告発内容は、次のようなものである。EZLN 支持基盤組織に、サンホセやサント・ドミンゴの土地にコーヒー園やトウモロコシ畑を認めようせず、1999年10月8日には、サンホセの垣根や耕作地が破壊されてしまった。また、1999年2月8日、9月14日には、同志が切り出した住宅建設用の木材を略奪している。さらに、1995年に連邦・州政府資金で実施された集団家畜飼養計画を CIOAC 官製派でないという理由で知らせず、売上を武器購入に流用したという。

告発の主眼点は、CIOAC 官製派指導部によるサパティスタ支持基盤組織の農地にある森林の木材伐採事業計画の無断強行である。カマロンらは、ブエナビスタ・パチャン住民の過半数の同意があったと称し、サンホセとサント・ドミンゴの森林から10年間木材切り出しの認可を環境省 (SEMARNAP)

から取り付けたのである。この計画に対して、EZLN 支持基盤組織は、エヒード内の PRI 派住民とともに、2月24日、環境省現地事務所に抗議文を渡すなど反対したが、CIOAC 派住民は指導部の甘言に丸め込まれているという。この告発に対して、州政府や環境省、ラス・マルガリータス地区当局は何の対策も講じなかった。そのことは、翌2001年2月7日、サンペドロ・デ・ミチョアカン自治地区審議会が、新知事サラサール(2000年12月 - 2006年11月)に、カマロンの森林伐採の実態を報告し、対策を要請していることから明らかである。²⁷⁾

カマロンはコミタン市内とラス・マルガリータス地区のユニオン・ビクトリアに製材所をもち、フロンテラ・コマラパ地区でも農地改革省の信託基金を利用した林業開発を展開していた。州政府の信託基金によって、CIOAC 官製派指導部40名は、フロンテラ・コマラパ地区のホセ・ドローレス・ロペス・ドミンゲス農場を取得していることも指摘されている。それが可能となったのは、CIOAC 官製派がアルボレス・ギジェン知事代行のサパティスタ締め付け作戦に積極的に「協力」したためである。告発状では、ラス・マルガリータス地区での宗教問題を口実にした反対派住民の迫害や追放を体系的に推進している張本人が CIOAC 官製派であることも指摘されている。²⁸⁾

(7) 宗教紛争と共同体の内部対立

1980年代以降、人口増加による土地の絶対的不足にともなって、ラス・マリガリータスやアルタミラーノ地区では、エヒードの運営をめぐる内部対立が目立つようになる。エヒードの土地拡大申請、生産計画援助金などをめぐる住民の分裂した利害は、熾烈な地区首長の選挙運動や所属する上部農民組織の選択などにおける対立ともなって現われるようになる。共同体におけるボス支配を克服し、先住民族トホラバルによる地域自治、「トホラバル権力」を創出しようとした1980年代半ば以降の試みも、1980年代末の経済危機によって露わになった共同体の住民の多様な利害の噴出のまえでは無力であった。

限られた資源をめぐる紛争は、政治的対立ではなく、宗教紛争という形で現われることも多かった。1966年から2001年までのチアパス州における宗教紛争に関する調査データでは、1985年以前、宗教紛争はチアパス高地に限定され、件数も年間5件以上となることはなかった。しかし、1988年以降は年間20件以上の年が多くなり、1991年からの10年間で、総数(339件)の7割を占めている。紛争の最頻発地区は、伝統派による新教徒追放が1970年代から継続しているチアパス高地のチャムーラ(145件)であることはいうまでもないが、第2位はラス・マルガリータス地区(48件)となっている。ラス・マルガリータス地区の宗教紛争が急増したのは、1990年代、とくに1994年のサパティスタ蜂起以降であり、宗教紛争の背景には土地紛争があることを明確に示唆している。²⁹⁾

本節では、先のブエナビスタ・パチャンのEZLN支持基盤組織による告発状で言及されていたアヤラ綱領エヒードの事例について紹介することにする。³⁰⁾ アヤラ綱領エヒードは、元ホタナ農場の住民の申請に基づき、1938年の大統領府令で2,166haのエヒードとして発足した。1947年に1,717haの拡張地が認められ、1961年と1987年にも546haと152haの拡張地が賦与されている。約4,500haのエヒードの正式構成員は282名だが、ラス・マルガリータス地区でも人口の多いエヒードのひとつで、1980年には1,036人だった人口が、2000年には2,171人に倍増している。この数値だけでも、土地不足が深刻な問題となっていることは容易に推測できよう。

このエヒードでアドベンティスト派新教徒16家族の追放が起きたのは1994年9月だった。2月に開催された共同体当局者と農民闘争エヒード組合の構成員との集会で、新教徒6名に1ヶ月以内の共同体からの自主退去が決定された。ラス・マルガリータス市の教会に避難した追放家族の告発で、追放主導の当事者7名が拘束されたが、エヒード責任者などの要請ですぐに釈放されている。

1995年5月18日、追放家族の帰還をめぐるエヒード集会には、農民闘争エ

ヒード組合の代表だけでなく、トホラバル民族組織の代表も参加した。後者は1994年2月の追放決議の場にはいなかったが、エヒード全体の意向を尊重する姿勢だった。追放家族側はコミタン市で州政府代表との会合をもったが、会合には CRIACH 代表のドミンゴ・ロペス・アンヘルも同席している。その結果、州司法検察庁の庇護のもと、1995年7月14日に帰村することになった。

いったん帰村した新教徒家族も、1995年9月、再び追放されることになる。1996年1月、追放家族はコミタン市エル・セドロ区の土地を不法占拠し、ロンバルディスタ全国統一（UNAL）の支援を受けていた。当初の指導者が拘束された後、同じエヒード出身のマルガリート・ルイスの組織するマヤの風（FIPI - Maya Ik）と接近するが、彼の PRD 上院議員指名争いでの敗北で立ち消えとなった。³¹⁾

1994年の新教徒家族追放後も、アヤラ綱領エヒードにおける新教徒は増加し続け、アドベンティストだけでなく、ペンテコステ、末日聖徒、キリスト再光臨派の信者などが存在していた。2000年1月9日のエヒード集会で、新教徒の教会建設禁止が採択され、1月26日の集会では16家族の追放が決定された。3月5日、追放措置が執行され、新教徒の建物14戸が破壊された。しかし、破壊された住宅再建費供与など州政府の仲介で、3月17日、追放家族は帰村した。

2000年3月の追放事件に際し、エヒード当局者は、新教徒側が CIOAC 独立派を顧問としていることを強く非難している。追放対象となった新教徒たちは、1997年に創設された「アヤラ綱領の力」農村生産組合（Sociedad de Producción Rural La Fuerza de Plan de Ayala）のメンバーだった。同組合は新教徒だけでなくカトリック教徒も参加している組織で、CIOAC 官製派に批判的な CIOAC 独立派によって形成されていた。しかし、実際に追放家族が支援を仰ごうとしていたのは、チアパス高地新教徒住民組織（OPEACH）だった。

追放推進者側では、農民闘争エヒード組合、トホラバル民族連合だけでな

く、CIOAC 官製派も積極的に支援活動を展開していた。5月の集会では、CIOAC 官製派が牛耳るラス・マルガリータス地区の輸送業者協同組合も支援者として参加していた。エヒードのカトリック・メンバーは、エヒードの共同作業への参加を拒否する新教徒家族の村内のチャメラダへの移転などを要求し続けた。共同作業参加や伝統祝祭の協力金の問題などをめぐり、紛争の両当事者と州政府の宗教問題局を交えた交渉が、6月から7月にかけて展開されていた。

しかし、連邦選挙と州知事選挙直後の7月19日、カトリックと新教徒の29家族が追放される事態が発生する。このことは、アヤラ綱領エヒードにおける紛争や対立が、宗教的対立と異なる次元の問題を孕んでいたことを明確に示唆している。しかし、2000年8月9日、エヒード構成員の過半数が参加した集会で、追放家族の帰村が承認され、新教徒側の要請で州警察250名の常駐が義務づけられた。帰村という合意が形成された背景には、2000年7月のチアパス州知事選挙で、PRD などが擁立した新教徒のパブロ・サラサル候補が州政府を掌握してきた PRI 候補を破ったことが大きく作用していると思われる。³²⁾

注

- 1) 1977年の CIOAC 支部創設者は、アヤラ綱領エヒード出身のマルガリート・ルイスで、1980年代半ばのトホラバル民族の自治政府運動を中心的に推進していく。
- 2) 1984-1988年に、171集落に約8万haが分与されたが、約8割は CNC 系集落である。独立系農民組織 CIOAC 系は約5,000ha、UU系は1,700haを分与された。知事就任時、占拠は203ヶ所だったが、離任時には428ヶ所に増加している。Daniel Villafuerte Solís et al., *La tierra en Chiapas. Viejos problemas nuevos*. FCE, 2002, pp.144-146.
- 3) 1980-1990年のラス・マルガリータス地区の新教徒比率は8%から21%に増加し、11%から16%というチアパス州の変化と比べるとかなり高い。1985年、ベラクルス・エヒードのサンマテオ農場占拠の主導権をめぐる内紛で、カトリック支持の CIOAC 派によるアドベンティスト派住民追放事件が起きている。José Luis Escalona Victoria, "Cambio político-religioso en una localidad tojolabal del municipio de las Margaritas, Chiapas", *Revista Liminar*, 2-2, 2004.
- 4) 審議会については、Antonio Hernández Cruz, "Autonomía Tojolab'al: genesis de un

- proceso”, en Aracely Burguete coord., *México: Experiencias de Autonomía Indígena*, IWGIA, 1999, pp.171-191. を参照。集会ではトホラバル審議会運動を担ってきたマルガリート・ルイスらが組織したインディオ人民独立戦線 (FIPI) の方針も表明された。
- 5) 1990年代半ば, UEPTは解消し, マヤ・トホラバル (Maya Tojolabal) エヒード組合となり, 土地と自由エヒード組合からは, 新しいトホラバルの力と団結 (Unidos con la Nueva Fuerza Tojolabal) 社会連帯組合が分離独立している。ラス・マルガリータス地区の CIOAC 傘下には, 土地と自由エヒード組合, 新しい道エヒード組合と合わせ 4 組織が所属している。
- 6) 加工場購入は独立系の UES, CIOAC, PRI 系の CNC, SOCAMA などによって1990年 4 月に創設された南部国境コーヒー生産者連合が申請している。Neil Harvey, *The Chiapas Rebellion. The Struggle for Land and Democracy*, Duke Univ. Pr, 1998, pp.186, 193 - 94.
- 7) 1990年代初頭のトホラバル CCI の活動については, Shannan L.Mattiace, *To see with Two Eyes. Peasant Activism & Indian Autonomy in Chiapas, Mexico*, Univ. New Mexico Pr. 2003, pp.77-79. を参照。
- 8) INI が独立系先住民組織と協調した例はオアハカ・コーヒー生産者州調整委員会がある。FIPI 傘下ながら, オアハカ州やキンタナロー州の先住民共同体や組織は FRS 参加を拒否された。Margarito Ruiz Hernández, “Todo indigenismo es lo mismo”, *Ojarasca*, No.17, 1993.
- 9) 26共同体を代表して返礼したグアダルーペ・テペヤックのウンベルト・トレホは EZLN 司令官タチョとして知られる人物だったとされる。Carlos Díaz Tello, *La rebelión de las Cañadas*, Cal y Arena, 2000, p.144.
- 10) FIPI傘下には, オアハカ州やキンタナロー州の先住民共同体や組織も加盟していた。
- 11) 集会では, ANCIEZ, OCEZ とともに, CIOAC 代表のトホラバルのアントニオ・エルナンデス (アヤラ綱領エヒード出身) が発言した。Carlos Tellos Díaz, *op.cit.*, pp.195-96. 集会に関しては, Thomas Benjamin, “A Time of Reconquest, the Maya Revolt, and the Zapatista Rebellion in Chiapas”, *The American Historical Review*, 105-2, 2000.を参照。
- 12) 農地問題については, Daniel Villafuerte Solís et al, *op. cit.*, pp.179-198を参照。
- 13) ラス・マルガリータス地区の CIOAC は EZLN 支持派と非支持派に分裂していた。親 EZLN 派は, CIOAC 独立派や新しいトホラバル連盟 (Nueva Alianza Tojolabal) を組織していたとされる。1994-1996年の CIOAC 地区執行委員ホセ・アントニオ・エルナンデス (通称カマロン) はサンペドロ・デ・ミチョアカン反乱行政地区審議会代表だったという指摘もあり, 実態は不明である。
- 14) Coordinación para el Diálogo y la Negociación en Chiapas, *Informe de labores, 2000-2004*, pp.45-48
- 15) 1996年 3 月中に合意が成立しなかったのは, フライレスカ地域のコーヒー農園労働者で構成されるフランシスコ・ビジャ農民人民連合 (UCPFV) だけだった。
- 16) EZLN, “Critica la negociación de un sector de la AEDEPCH con el gobierno”, en EZLN, *Documentos y comunicados*, Era, 1995, tomo 2. pp.345-47.
- 17) Germma Van der Haar, “Land Reform, the State and the Zapatista Uprising in Chiapas”, *Journal of Peasant Study*, 32-3, 2005, pp.484-507.
- 18) 第 4 回 CIOAC 地域会議では, 「紛争地域」の CIOAC 活動家 6 名に対して, 農地供与を妨害したという理由で追放措置がとられた (*La Jornada*, 7/octubre/1997)。

- 19) 事件に関しては, Astrid Pinto Durán y Martín de la Cruz López Moya, “Comunidad diferenciada. Linchamiento por brujería e imaginarios políticos en un pueblo tojolabal”, *Revista Liminar*, 2-1, 2004.
- 20) Coordinación para el Diálogo y la Negociación en Chiapas, *Informe de labores, 2000-2004*, 2005, pp.41-48. ガビーノ・バレラの元 EZLN 支持60家族はマヤ・トホラバル民族連合に属する。
- 21) 軍侵攻の報告は, CCIODH, *Primer informe*, Chiapas, Febrero,15-28, 1998; Adriana López Monjardin, “No tengo miedo ni pena. La resistencia de las mujeres zapatistas”, *Masiosare*, 1/febrero/1998を参照。また, 軍侵攻に抵抗した女性たちの告発は Germma Van Der Haar y Carlos Lenkersdorf, *San Miguel Chiptik. Testimonios de una comunidad tojolabal*, Siglo XXI, 1998, pp.125-128. に所収されている。この13集落は2000年に独立してトホラバル系住民で作った新しいピセンテ・ゲレロ反乱行政地区を構成する集落である。
- 22) フローレス・マゴン地区タニペルラス (4月8日), 土地と自由地区アンパロ・アグアティンタ (5月5日), サンフアン・デラ・リベルター地区エル・ボスケ (6月13日) にある反乱行政地区役場などが, 軍警察要員を動員した攻撃で破壊された。
- 23) 反乱行政地区「11月17日」に属するトホラバル系農民の「4月10日」, ラ・エスペランサ, ガビーノ・バレラなどの新入植地の破壊が前提となっていた。
- 24) Base de apollo(sic) de EZLN de Buena Vista Pachán, *Denuncia*, 17/marzo/2000.
- 25) JBF de La Realidad, *Carta*, 29/noviembre/2005。1997年5月に交替した代表「ルベン」に該当すると思われるが不明な点も多い。Hermann Belinghausen, “Cambia poderes el consejo municipal chiapaneco”, *La Jornada*, 26/mayo/1997.
- 26) 土地と自由エヒード組合に属していたブエナビスタ・パチャンの約80家族は, 1992年段階からEZLNと接触を持っていた。EZLN支持派は, 1995-1996年段階で二つに分かれ, 1999-2000年段階でさらに分裂し, 30家族が抵抗を継続したとされる。Marco Estrada Saavedra, *La comunidad armada rebelde y el EZLN*, El Colegio de México, 2007, pp.464-466.; *La Jornada*, 21/Marzo/2000.
- 27) Consejo Autónomo en Rebeldía de San Pedro de Michoacán, *Denuncia*, 7/febrero/2001.
- 28) 1997年11月20日のサルティージョでの非カトリック追放, 1999年3月10日のパライソでのペンテコステ派礼拝所破壊, 8月12日の長老派信者住居10戸の破壊, 2000年3月の「アヤラ綱領」の33家族追放があげられている。
- 29) Carolina Rivera Farfán, María del Carmen García Aguilar, Miguel Lisbona Guillén, Irene Sánchez Franco y Salvador Meza Díaz, *Diversidad religiosa y conflicto en Chiapas. Intereses, utopías y realidades*, UNAM/CIESAS/COCYTECH, 2005, pp.133-163.
- 30) 以下は *ibid.*, pp.283-311に依拠している。同書にはこの事例以外にもサルティージョの詳しい事例研究がある。
- 31) 現時点では, 自治民族独立農民組織 (OCIPA) の支援で25家族が生活を続けている。
- 32) 実際には2001年からも新教徒への迫害は継続し, 2001年8月9日, アヤラ綱領エヒードの住民80名は, CIOAC 歴史派500名の攻撃を恐れ, 村外に避難している。